

# マルチ・メディアの大学教育

天 城 勲

(放送教育開発センター所長)

これより、放送教育開発センターで、第3回の大学放送教育研究シンポジウムを今・明日開催いたしたいと思います。

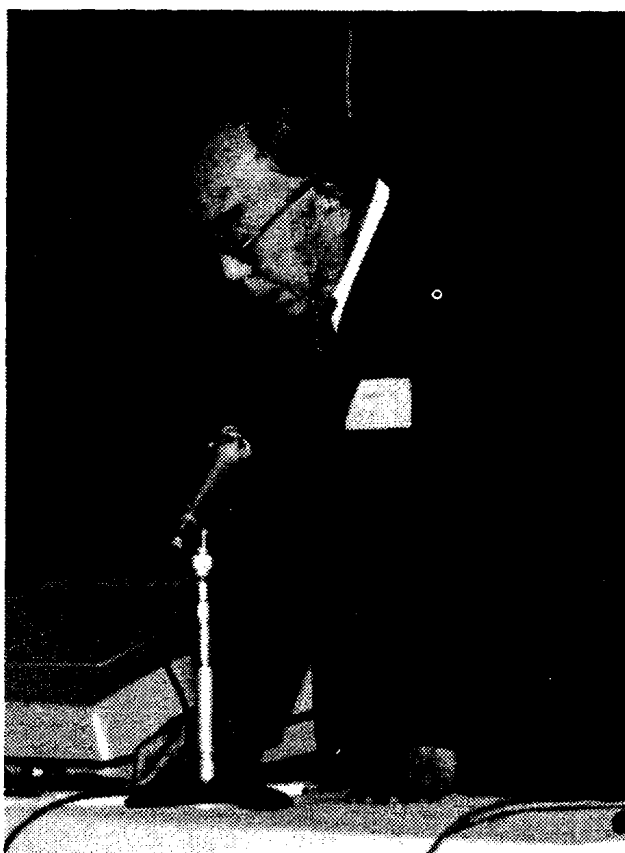
遠路、幕張においでいただきまして、恐縮でございます。去年までは東京でこのシンポジウムを行ってございましたけれども、今回は、このセンターのスタジオもできたところでございますし、また、放送大学も正式に東京からこちらに移ってきているときでございまして、特にスタジオはフル回転をしているという現場でございますので、この地で開いて、いまできたところをシンポジウムの機会につぶさに見ていただきたいという趣旨もございました。

いまさら、放送大学の意味を申し上げる必要はないのでございますけれども、このセンターといたしましては当面は放送大学の開学に向けて、全力を挙げてご協力申し上げ、一体になって仕事をしているわけでございますが、実はこのシンポジウムには、53年にこのセンターができて実験番組を開始し、かつささやかな陣営で研究・開発を続けてまいったその結果の研究発表会という意味もでございます。放送による大学教育ということは、いろいろな見方がございますけれども、いわゆる伝統型の大学とは違う大学教育を行うことでございます。放送というと放送だけにとらわれがちでございますが、皆さんご存じのとおり、大学教育の一定の教育内容を、映像、あるいは音声、また、当然大学教育に必要な活字メディアの教材、さらには面接とか通信とか、いろいろな多媒体による学習ということが本質でございます。結論は個別学習を可能にしていこうということにあるわけで、お手元にお配りしていると思いますけれども、いま早々の間で、まだ紀要という段階に至りませんが、とにかくいろんな開発・研究の過程で出てきたものは

お伝えしようということで研究ノートをつくりましたが、この刊行物の表題をあえてマルチ・メディア・エデュケーションといたしたのも、多媒体の教育だということでございます。

実はこの多媒体ということはいろんな面で日進月歩でございまして、いわゆるニューメディアの問題がわれわれの目の前の課題になっております。これはどういことになるのか、われわれもいささか戸惑っているところでございますが、いずれにしても、情報伝達の手段としてのメディアの発達と、それから、映像をつくる制作上のニューメディアと申しますか、新しい技術の発展の両面がございします。

そういうことを前提に置きながら研究・開発を進めているわけでございますが、第1回、第2回とは、今回は方向を変えました。お手元にプログラムもございしますので、おわかりと思いますが、最初に放送大学の香月学長と教育研究所の木田所長に、放送大学開学を目の前に控えて、それぞれの長い経験とご見識のもとにオープニングの発題をしていただきます。続いて、映像表現についても多様性がございしますので、同じテーマをいろいろな場面で映像化してみるということでこ



れは柳川先生に大変ご苦労願って、いわゆるオーディション番組をつくりまして、これをいろいろな形で受講者の反応を見たのを印刷教材と映像でごらんいただいた上でご批判をいただき、かつ制作者からのディフェンスをしておらうというつもりでおります。

それからもう一つは、まだ日本は未経験でございますもので、すでに先行をしておりますオープン・ユニバーシティーとか、アメリカの幾つかの遠隔教育のプログラムがございしますが、その中で類似の番組を拾いまして、同じ

テーマを一体どのようなアプローチをしているかを、内容と同時に、表現の形式や印刷教材のつくり方も比較してみようということで、配布資料の中に今回は番組に対応するテキストを全部含めてございます。

このように、いま開発センターでやっております研究・開発のプロセスを一偏皆さんに見ていただきまして、今後の日本の放送大学を控えて、また、放送による大学教育の将来の発展を展望しながらを探していきたいと考えておるわけでございます。これから今日見ていただく番組やお話しすることは、決して、これが一番いいんだという結論を申し上げるつもりでは毛頭ございません。いろんな角度から検討していくという見方があるということをお互いに勉強し合えば大変結構ではないかと思っております。

なお、開発センターとしては、現在六つの国立大学で公開講座を放送を通じて行っておりますが、今回は、この六大学との共同研究体制の中から、ひとつ大阪大学でやっていただいた番組も材料にご登場願って、話の狙上についていただくつもりでおるわけでございます。

すべては見てからのご議論ということになろうかと思います。前置きよりも、皆さんの活発なご討議を期待いたしまして、開会のあいさつにかえたいと思います。重ねて、遠路ご参集をいただきましたことを心から御礼申し上げます。どうもありがとうございました。